

(様式1)

平成23年度  
研究助成報告書

提出日 平成24年3月30日

研究の種類

共同研究(含む海外)  個人研究  出版助成

研究課題名

「近世戦衣の素材・技法・意匠における外国染織の影響に関する研究」

研究代表者及び研究分担者(所属・職名・氏名)

家政学部・教授・長崎 巖

研究期間(当該年度期間に何時何処でどんな事をしたか、年間スケジュールを記入)

〈例：7月25日 共立博物館において〇〇の資料収集〉

- ・平成23年6月4日(土) 一宮市博物館墨コレクション染織品調査。
- ・平成23年11月20日(日)～21日(月) 仙台市博物館において伊達家伝来染織品調査。
- ・平成23年12月24日(土)～平成24年1月25日(水) 共立女子大学本館907 染織文化研究室において、学生アルバイト3名を雇用し、資料整理・データ入力作業を行った。
- ・研究期間終了後ではあるが、研究成果の一部として、平成24年5月8日(月)より共立女子大学本館1階にて、「武士(もののふ)の“ダンディズム” 町人の“いなせ”」展を行う。

(様式2)

|                      |
|----------------------|
| 研究組織 [氏名, 所属, 役割分担]  |
| (共同研究のみ記入)           |
| 研究発表 (印刷中も含む) 雑誌及び図書 |
|                      |

## (様式3)

## 研究実績の概要

武家男性の服飾で、武家の「もののふ」としての本質を最も明確に象徴する染織品として、小袖の上に着用する胴服や、戦時に鎧の上に着用する陣羽織などをあげることができる。桃山時代、陣羽織が次第に、武人が戦場で最期を飾る晴れ着としての意味とともに、身分や財力の象徴としての役割を持つようになってくると、さらに装飾性が加わって、生地や形状・模様などに様々な趣向を凝らしたものが作られるようになった。その結果、生地では主として中国から伝わった金襴や緞子などのいわゆる名物裂系の染織品と、南蛮船によってもたらされた羅紗・ピロード・綴織・更紗などのヨーロッパ・東南アジア系の染織品が加わったほか、輸入された獣毛や鳥毛も用いられるようになった。また形の上では実用的な袖無し形のほか、南蛮服の影響を受けたと思われる特異な形状のものも見られるようになる。

本研究は、近世初期に完成され、江戸時代を通じて制作された陣羽織を中心とする戦衣の素材・技法・意匠における外国染織の影響について、現存遺品の実地調査、文献資料を用いた情報収集を中心に、さらにこれらを有機的に結び付けて、現存遺品に見られる素材が外国のどのような地域からもたらされたのか、技法や意匠がどの国の染織品の影響を受けているのか、形状や仕立てに外国のどの服飾の影響が反映されているのか、などを検証していくことを目的とする。

上記の目的を達成するために、以下の調査を行った。

○平成23年6月4日(土) 一宮市博物館墨コレクション染織品調査においては、江戸時代から近代までの毛織物を集めた墨コレクションの中から、陣羽織に焦点を当てて調査を行った。

○平成23年11月20日(日)～21日(月) 仙台市博物館において伊達家伝来染織品調査を行った。

## ＜調査作品＞

山形文様陣羽織 桃山時代～江戸時代初期 16世紀 (伊達政宗所用)

水玉模様陣羽織 江戸時代 18世紀後半～江戸時代 19世紀前半 (伊達政宗所用ではないと考えられる。)

縫い取り織陣羽織 江戸初期 17世紀 (伊達家家臣片倉家伝来)

紺平絹地小花散模様小紋染胴服 桃山時代 16世紀～江戸時代初期 16世紀 (豊臣秀吉から片倉小十郎重長へ下賜)

白天鷲絨地陣羽織 桃山～江戸時代初期 16世紀 (伝徳川家康所用)

黒羅背板胴服 桃山時代～江戸時代初期 16世紀 (伊達正宗所用)

紅地牡丹唐草模様陣羽織 桃山時代 16世紀 (豊臣秀吉所用)

孔雀羽根織込陣羽織 江戸時代 18世紀 (伊達重村所用)

○研究期間外ではあるが、平成24年5月8日(月)より共立女子大学本館1階にて、「武士(もののふ)の“ダンディズム” 町人の“いなせ”展を行う。